

「私とジェンダー」をテーマに  
毎回様々な切り口でコラムを  
掲載しています。

# 私とジェンダー

おがわ・まちこ

1964年関西に生まれる。著書に『性同一性障害はオモシロイ』（現代書館1999）、『女が少年だったころ』（作品社 2002）、『女子高生になれなかった少年』（青弓社 2003）、『明るいトランスジェンダー生活』（トランスビュー 2004）、『性同一性障害の社会学』（現代書館2006）。共著で『性を再考する』（青弓社2003）など。NPO法人SEAN理事。

小川 真知子

## ♪現在

その昔、♪現在、過去、未来♪という歌があったが、「わたしとジェンダー」といお題で文章を書こうとすると、ついこの歌が頭の中をめぐる。「女であること」に長い間こだわってきた。現在、54歳。週4日は西宮市男女共同参画センターの非常勤嘱託として、講座の企画・運営や資料貸出しなどの仕事をし、週1回大学の非常勤講師としてジェンダー論を担当している。

だから、ジェンダーということばを見聞きしない日はないし、友人、知人もジェンダーに敏感な人が多い。ジェンダーにどっぷりはまった、ジェンダー漬けの日々である。

ジェンダーが問題なのは、当然、あたり前。なんでこの社会問題を放置できるのよ？わたしが普通に気持ちよく生きるには、この問題を解決するしかないと思っっている。

しかし、ジェンダーという問題はそうそう簡単に「解決」できる問題ではない。となると、とにかく目の前のこと、日々の仕事をやっていく…。とまあ、そんな現在である。

## ♪過去

すみません。貴重な紙面ですが、ちよっとだけ昔話に付き合ってください。わたしは新潟の片田舎のフツの貧乏農家に生まれた。大学に進学するつもりだったのに、高校2年のとき、お前は女の子だから、弟を大学にやるために進学はあきらめてくれと言われ、女であることは損だと知った。それが「わたしとジェンダー」との出会いで、大事なルーツである。このことがあったから、今後女の子がこんな思いをしなくてすむ世の中にしたいたいという活動をしている。

ジェンダーもフェミニズムも性差別ということばも、ジェンダー論も女性学も、婦人問題学習もなかった（あっただろうけど、知らなかった）時代。大阪で万博があった、70年の話である。

しかし、わたしはエライかった！（と、自分で自分をほめておこう）親に頼らず、自分で大学に行けばいいと、立命館大学の二部（夜間）に進学し、誰も知らない京都にやってきたのである。「三丁目の夕日」ほど古く

はないが、中学生の集団就職がまだ生きていた時代なので、18歳で上京した自分はいってエライわけではないが、一言も反対しなかった親はエライと感謝している。

その後、27歳で日本女性学研究会に入会する。そこで「あなたもノーと言いなさい」ということばに出会うのである。「女は損」だが、「女らしくすれば、オンナ人生の損はない」空気のようにならないう、この「女らしさ」の呪縛から自由でなかったわたしにとって、「ノーを言いなさい」は魔法のことば、魔法の杖だった。

そのあたりのことは『フェミニズムと対話した女性たち』（新水社）に書いた。わたしの文章の最後は「フェミニズムと出会って、面白いことにいっぱい出会えた。友だちも、仕事も、趣味も、快適な日常も手に入ることができたと思っっている」で終わっている。